

# 卒業生に対する 学修成果に関する調査報告

令和元年 9 月  
志學館大学 学務委員会  
志學館大学 IR室

## 1. 趣旨

学生が4年間の学修成果をどのように考えているかを調べるために、平成30年度卒業生及び大学院修了者を対象に、ユニバーサルパスポートシステムを用いてアンケート調査を実施した。なお、卒業式の日までに未回答であった者を対象として、紙ベースの追加調査も行った。

本学のディプロマポリシー（以下、DPという。）とそれに基づくカリキュラムは、平成30年度入学者より大幅に改訂された。今回対象とした卒業生は、それらの下での教育を受けた者ではないが、今後の追跡調査のために、敢えて現行のDPを基準として調査した。

## 2. 資料

アンケートの設問は、現在のDPを基に6つのカテゴリーに分けられる14項目とした。これらについて、「大学でのさまざまな学修によって、設問の能力や知識を身につけたと感じているか」を問い、「4. 大変身について」、「3. 身についた」、「2. 少しは身についた」、「1. 身につかなかった」の4つの選択肢から回答を求めた。各設問を、DPカテゴリーと対応させて以下に示す。本学のDPは、巻末に付録として示してある。

- DP1 1. 個性的かつ堅実な人間性、自主性、創造性
- DP2 2. 人類の文化、社会と自然に関する教養
- 3. 物事を科学的に、論理的に考える方法や力
- 4. コンピュータの操作方法や情報処理技術
- 5. コミュニケーションの能力
- 6. 自ら学ぶことが楽しく、喜びであると感じる姿勢
- DP3 7. 専門分野や所属する学科の専門知識や技能
- 8. 総合的な問題発見能力や課題を解決する能力
- DP4 9. 仕事や働くことの意味についての自分自身の考え
- 10. 生涯にわたって学習を続けていく意思や力
- DP5 11. 倫理観
- 12. 地域社会の発展に貢献したいという気持ちや意識
- DP6 13. 多様な言語・社会・文化に対する理解
- 14. 国際人として活躍する素地

これらの設問は、「平成30年度学生生活調査」の学修成果に係る設問とできるだけ同じとし、在学中の学修行動、4年間の学修成果及びDPが標榜する卒業時に期待される知識・技能等の達成度を統合的に把握できるようにした。

表1 調査対象及び回答者の数

学科等	対象学生数	回答者数	回答割合
心理臨床	97	80	0.82
人間文化	40	37	0.93
法律	68	62	0.91
法ビ	41	39	0.95
学士課程小計	246	218	0.89
大学院	10	7	0.70

## 3. 分析結果

評価対象者は256人で、回答率は、学士課程卒業生で89%、大学院修了生で70%であった（表1）。学士課程での回答率の学科間での差は、顕著なものではなかった。

### 3.1 学士課程

**1. 個性的かつ堅実な人間性、自主性、創造性：**各学科及び学士課程全体（以下「全学」という。）の学生の回答の平均値、標準偏差、最頻値を表2に示す（大学院課程についても表には示すが、説明の記載はあとで別に示す）。

各学科の平均値は、全学平均値である3.0近傍にあり、学科間の差は小さかった。全学での標準偏差は0.74で、すべての設問中でもっとも

表2 Q1に関する統計的代表値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	3.1	0.74	3
人間文化	3.0	0.76	3
法律	3.0	0.71	3
法ビ	3.0	0.79	3
学士課程小計	3.0	0.74	3
大学院課程	3.3	0.49	3

小さかった。これは、学生の受け止め方が相対的に一様であることを示す。最頻値は、全学及びすべての学科で3であった。

この設問への回答の分布を図1に示す（大学院課程は資料数が少なかったため、学士課程4学科のみを示す。以下同じ）。

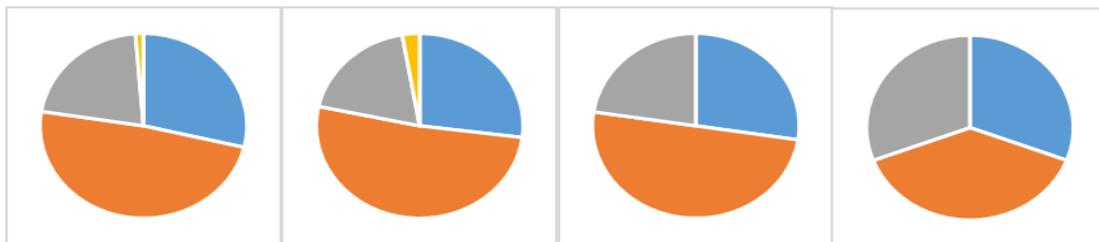


図1 学科別の設問1への回答の分布：左から心理臨床学科、人間文化学科、法律学科、法ビジネス学科。各図で、右回りに評価4、3、2、1の順。以下の図で同じ。

### 2. 人類の文化、社会と自然に関する教養：

全学での平均値は2.9で、やや低かった設問3つ（ほかにQ4及びQ13）の中の一つである。学科間では、人間文化学科が3.1でもっとも高かった。学科の特色を表しているものと考えられる。最頻値は、全学でもすべての学科でも3であった。

学士課程でのこの設問への回答の分布を図2に示す。人間文化学科で4が多いことが看取できる。

表3 Q2に関する統計的代表値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	2.9	0.75	3
人間文化	3.1	0.89	3
法律	2.8	0.75	3
法ビ	2.8	0.76	3
学士課程小計	2.9	0.77	3
大学院課程	2.7	0.49	3

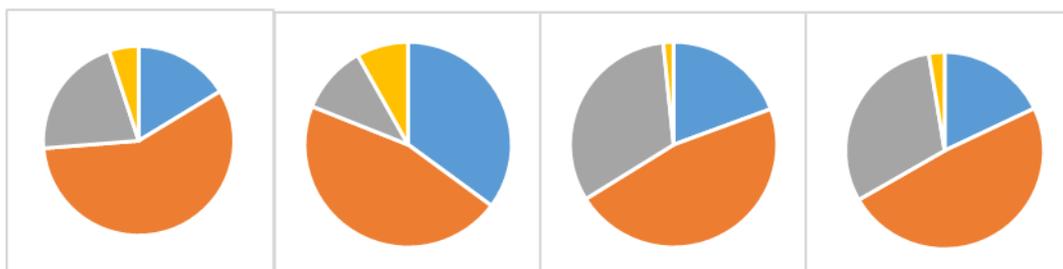


図2 学科別の設問2への回答の分布

### 3. 物事を科学的に、論理的に考える方法や力：

平均値は、すべての学科で、全学平均値である3.0近傍にあり、学科間の差は少なかった。最頻値は、全学、すべての学科で3であった。

学士課程でのこの設問への回答の分布を図3に示す。

表4 Q3に関する統計的代表値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	3.0	0.86	3
人間文化	3.1	0.88	3
法律	3.0	0.86	3
法ビ	3.0	0.84	3
学士課程小計	3.0	0.85	3
大学院課程	3.3	0.49	3

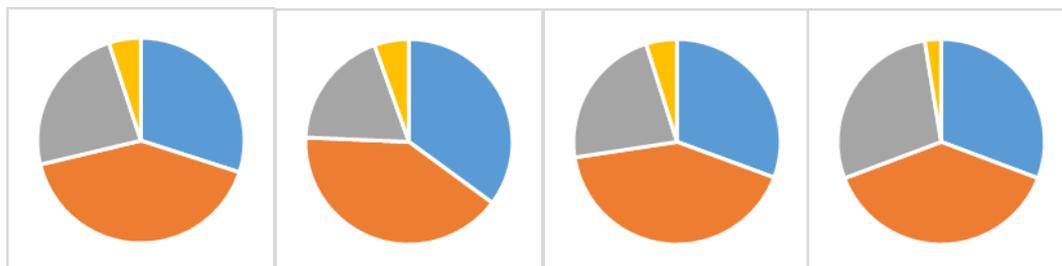


図3 学科別の設問3への回答の分布

**4. コンピュータの操作方法や情報処理技術：** 全学での平均値は2.9で、やや低かった設問3つ（ほかにQ4及びQ13）の中の一つである。学科間では、人間文化学科が3.1と高かった。最頻値は、法ビジネス学科で2、他の学科で3であった。

学士課程でのこの設問への回答の分布を図4に示す。

表5 Q4に関する統計的代表的値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	3.0	0.79	3
人間文化	3.1	0.74	3
法律	2.9	0.87	3
法ビ	2.8	0.87	2
学士課程小計	2.9	0.82	3
大学院課程	3.3	0.76	3.5

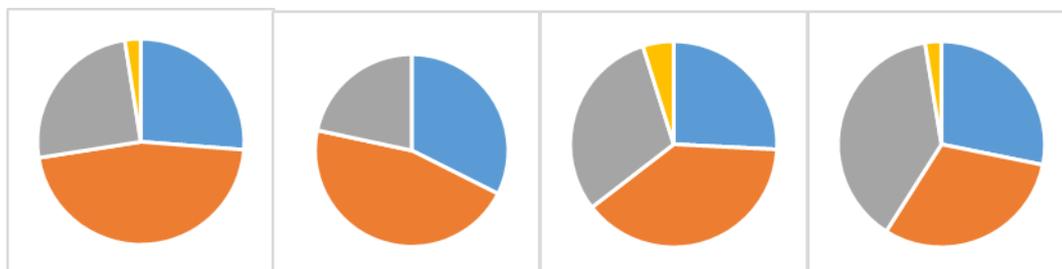


図4 学科別の設問4への回答の分布

**5. コミュニケーションの能力：** 平均値は、すべての学科で、全学平均値である3.1近傍にあり、学科間の差は少なかった。最頻値は、法ビジネス学科で4、他の学科で3であった。

学士課程でのこの設問への回答の分布を図5に示す。

表6 Q5に関する統計的代表的値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	3.1	0.80	3
人間文化	3.2	0.78	3
法律	3.0	0.85	3
法ビ	3.1	0.90	4
学士課程小計	3.1	0.82	3
大学院課程	3.7	0.49	4

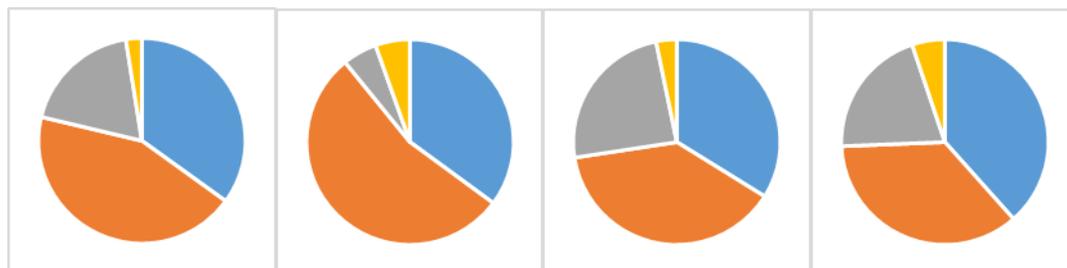


図5 学科別の設問5への回答の分布

**6. 自ら学ぶことが楽しく、喜びであると感じる姿勢：** 平均値は、すべての学科で、全学平均値である3.1近傍にあり、学科間の差は少なかった。最頻値は、人間関係学部2学科で4、法学部2学科で3であった。

学士課程でのこの設問への回答の分布を図6に示す。人間文化学科で4が多いことが看取できる。

表7 Q6に関する統計的代表的値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	3.1	0.84	4
人間文化	3.2	0.89	4
法律	3.1	0.76	3
法ビ	3.2	0.79	3
学士課程小計	3.1	0.81	3
大学院課程	3.6	0.54	4

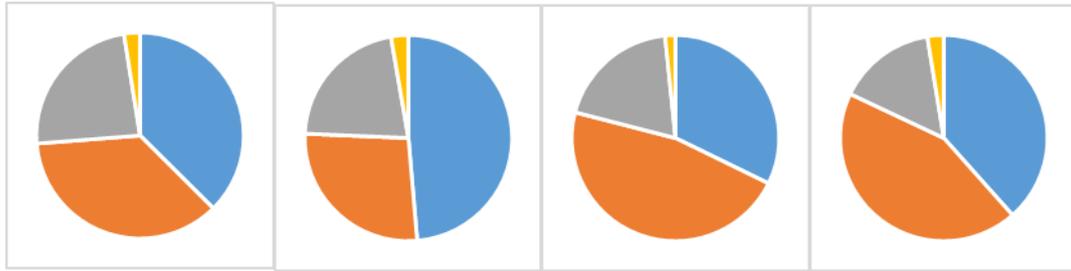


図 6 学科別の設問 6 への回答の分布

**7. 専門分野や所属する学科の専門知識や技能：** 全学の平均値が 3.2 と、もっとも高かった設問である。学科間では、心理臨床学科で 3.3 ともっとも高かった。なお、この値はすべての設問・学科中でもっとも高い値である。

最頻値は、心理臨床、法ビジネス学科で 4、法律学科では 4 と 3 が同数、人間文化学科で 3 であった。この点でも、3 学科で最頻値が 4 となった唯一の設問である。

学士課程でのこの設問への回答の分布を図 7 に示す。

表 8 Q7 に関する統計的代表値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	3.3	0.72	4
人間文化	3.0	0.82	3
法律	3.2	0.75	3.5
法ビ	3.1	0.83	4
学士課程小計	3.2	0.77	3
大学院課程	3.6	0.54	4

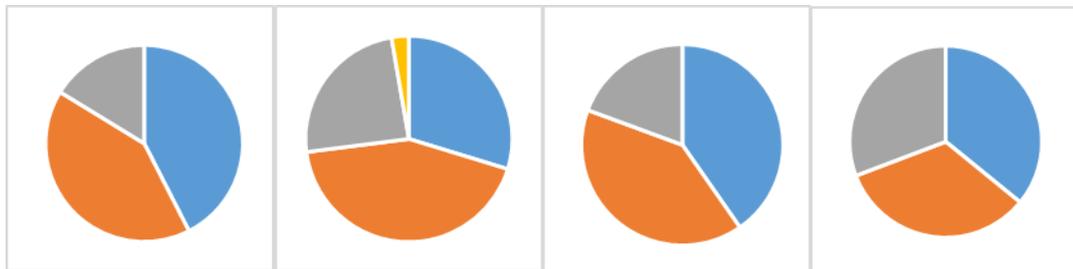


図 7 学科別の設問 7 への回答の分布

**8. 総合的な問題発見能力や課題を解決する能力：** 平均値は、すべての学科で、全学平均値である 3.0 近傍にあり、学科間の差は少なかった。最頻値は、全学でもすべての学科でも 3 であった。

学士課程でのこの設問への回答の分布を図 8 に示す。

表 9 Q8 に関する統計的代表値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	2.9	0.75	3
人間文化	3.0	0.83	3
法律	3.1	0.78	3
法ビ	2.9	0.79	3
学士課程小計	3.0	0.78	3
大学院課程	3.1	0.38	3

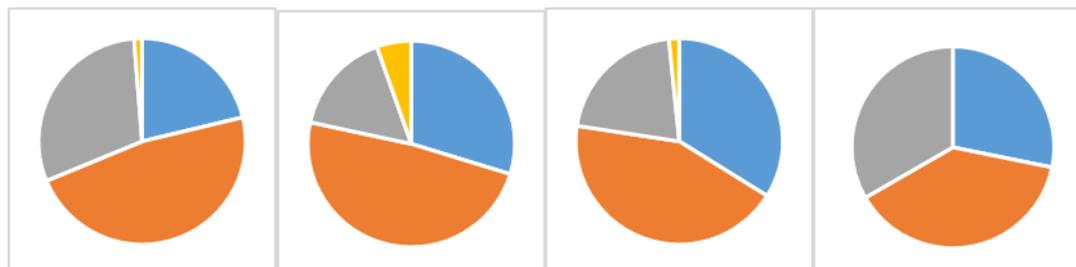


図 8 学科別の設問 8 への回答の分布

**9. 仕事や働くことの意味についての自分自身の考え：** 平均値は、法ビジネス学科で3.3ともっとも高かった。なお、この値は、Q7とともに、すべての設問・学科中でもっとも高い値である。

最頻値は、法学部の2学科で4、人間関係学部の2学科で3であった。全学で次のQ10とともに4であったことに、注目できる。

学士課程でのこの設問への回答の分布を図9に示す。法学部の2学科で4が多いことが看取できる。

表10 Q9に関する統計的代表値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	3.1	0.83	3
人間文化	3.1	0.88	3
法律	3.1	0.85	4
法ビ	3.3	0.85	4
学士課程小計	3.1	0.84	4
大学院課程	3.3	0.49	3

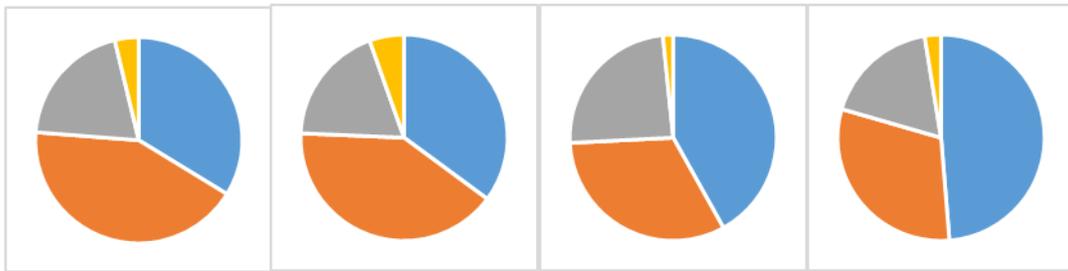


図9 学科別の設問9への回答の分布

**10. 生涯にわたって学習を続けていく意思や力：** 平均値は、すべての学科で、全学平均値である3.1近傍にあった。全学の標準偏差は、0.87で比較的大きかった。学生の感じ方にばらつきが大きいものと見られる。

最頻値は、法ビジネス学科で4、他の3学科で3であった。全学では、前のQ9とともに4であった。

学士課程でのこの設問への回答の分布を図10に示す。

表11 Q10に関する統計的代表値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	3.1	0.85	3
人間文化	3.1	0.88	3
法律	3.0	0.86	3
法ビ	3.2	0.94	4
学士課程小計	3.1	0.87	4
大学院課程	3.4	0.53	3

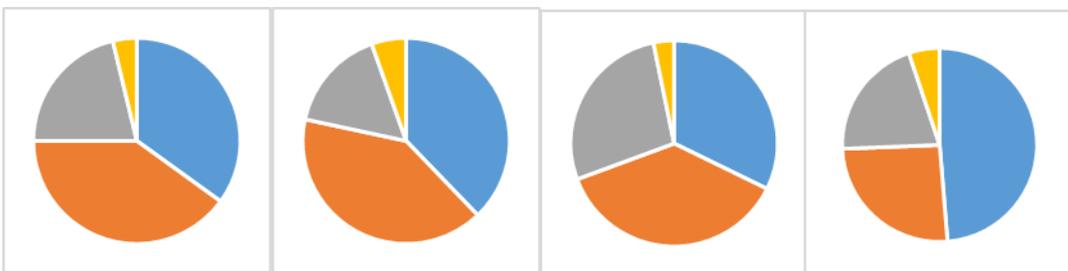


図10 学科別の設問10への回答の分布

**11. 倫理観：** 平均値は、すべての学科で、全学平均値である3.0近傍にあり、学科間の差は少なかった。最頻値は、全学でもすべての学科でも3であった。

学士課程でのこの設問への回答の分布を図11に示す。

表12 Q11に関する統計的代表値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	3.0	0.90	3
人間文化	3.1	0.88	3
法律	2.9	0.83	3
法ビ	3.0	0.78	3
学士課程小計	3.0	0.85	3
大学院課程	3.7	0.49	4

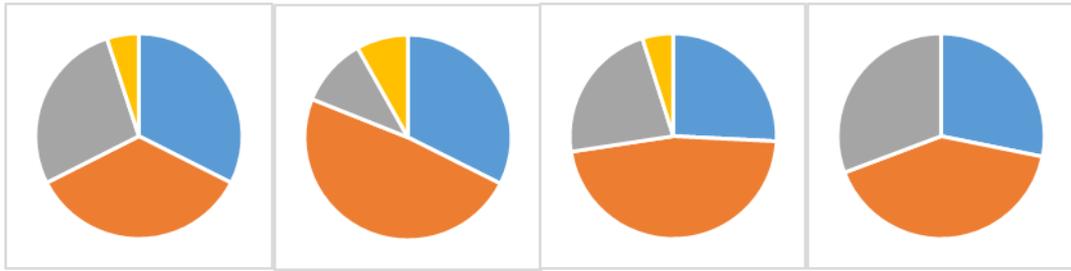


図 11 学科別の設問 11 への回答の分布

**12. 地域社会の発展に貢献したいという気持ちや意識：** 平均値は、すべての学科で、全学平均値である 3.0 近傍にあり、学科間の差は少なかった。最頻値は、全学でもすべての学科でも 3 であった。

学士課程でのこの設問への回答の分布を図 12 に示す。

表 13 Q12 に関する統計的代表的値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	2.9	0.87	3
人間文化	3.1	0.86	3
法律	3.0	0.79	3
法ビ	3.1	0.87	3
学士課程小計	3.0	0.84	3
大学院課程	3.4	0.54	3

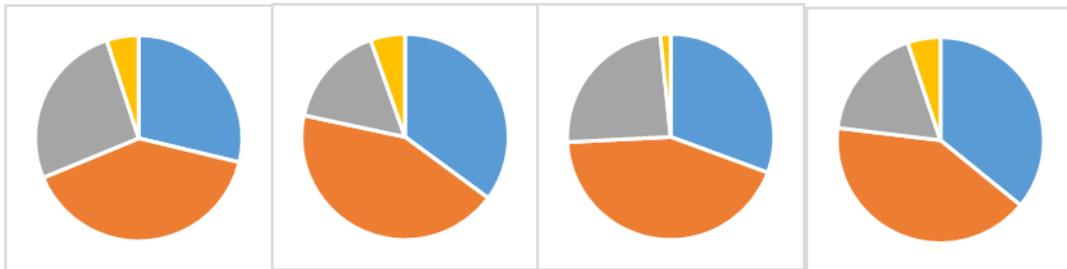


図 12 学科別の設問 12 への回答の分布

**13. 多様な言語・社会・文化に対する理解：** 全学の回答の平均値は 2.9、やや低かった設問 3 つの中の一つであった。ただし、学科ごとに見ると、人間文化学科で 3.2 と高く、心理臨床学科で 2.8 と低く、学科間で差が大きかった。最頻値は人間文化学科で 4、他の学科で 3 であった。平均値と合わせて、人間文化学科の特色が表れているものと考えられる。

学士課程でのこの設問への回答の分布を図 13 に示す。

表 14 Q13 に関する統計的代表的値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	2.8	0.89	3
人間文化	3.2	0.83	4
法律	3.0	0.80	3
法ビ	3.0	0.81	3
学士課程小計	2.9	0.85	3
大学院課程	2.7	0.49	3

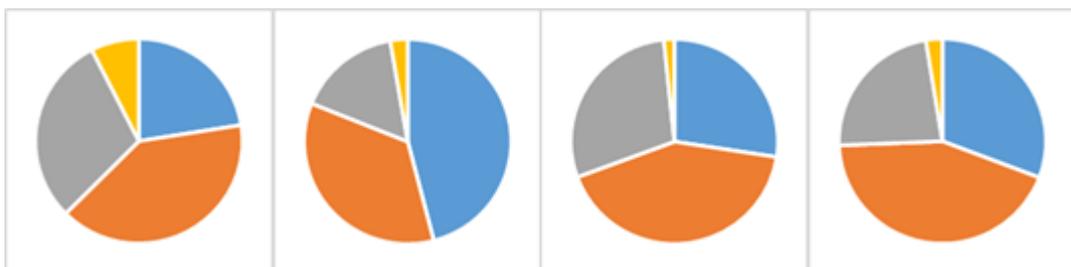


図 13 学科別の設問 13 への回答の分布

**14. 国際人として活躍する素地：** 全学の回答の平均値は2.6で、全設問中できわだって低かった。学科間でも、人間文化学科の2.9から心理臨床学科の2.4まで大きな差があった。なお、この2.4はすべての設問・学科中でもっとも低い値である。標準偏差は0.99で、すべての設問中でもっとも大きかった。留学や海外研修などの経験の有無が差に反映していると推定される。最頻値は、人間文化学科と法ビジネス学科では3で、心理臨床学科と法律学科では2であった。

表 15 Q14に関する統計的代表的値

学科等	平均値	標準偏差	最頻値
心理臨床	2.4	1.03	2
人間文化	2.9	0.95	3
法律	2.6	0.99	2
法ビ	2.7	0.85	3
学士課程小計	2.6	0.99	3
大学院課程	2.3	0.49	2

学士課程でのこの設問への回答の分布を図14に示す。人間文化学科で4が多いことが看取できる。

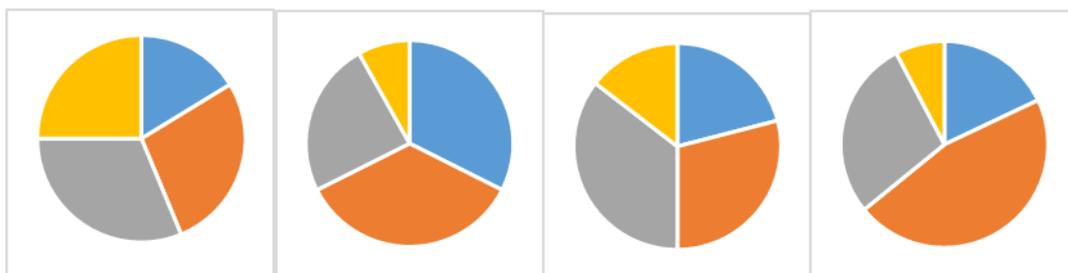


図 14 学科別の設問 14 への回答の分布

**DP 項目ごとの受け止め方：** 学士課程での回答を、各設問を対応する6つのDPカテゴリー別にまとめて分布を調べた結果を図15に示す。DP1～3及びDP5では、3にモードを持ち、左に裾を引く、似通った分布を示したが、DP4とDP6は、異なる分布を示した。DP4では4にモードがあり、DP6ではモードは3であるが2と1の比率が比較的高いものであった。

これらのことは、DP4「職業観を持ち生涯学習し続ける能力を有している」の達成度は比較的高く、DP6「多様な言語・社会・文化を理解し、国際人として活躍する素地を持っている」すなわちグローバル化対応能力の達成度は低いと学生が感じていることを示唆していると考えられる。

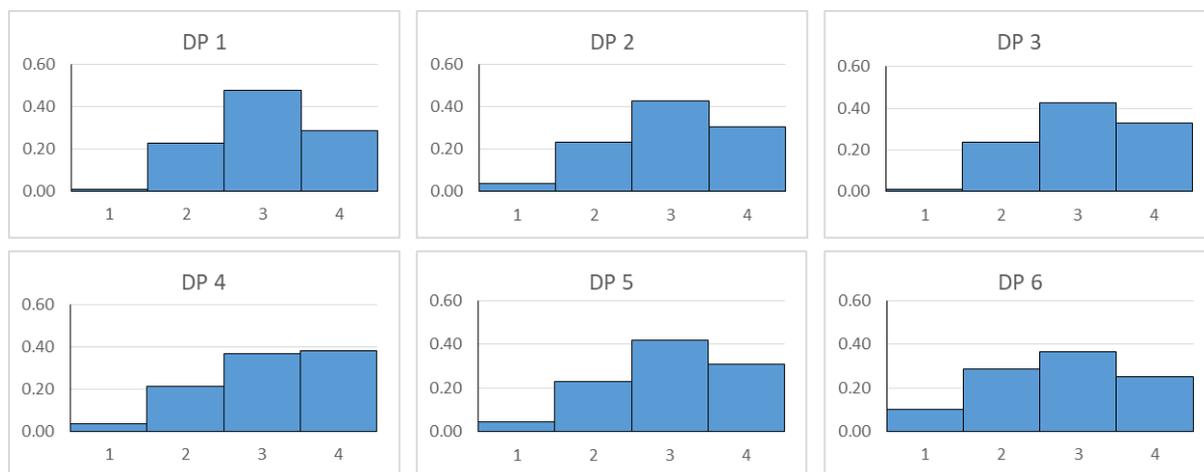


図 15 GP カテゴリー別の回答の分布

### 3.2 大学院課程

大学院課程では、回答の平均値は、Q5「コミュニケーションの能力」、Q6「自ら学ぶことが楽しく、喜びであると感じる姿勢」、Q7「専門分野や所属する学科の専門知識や技能」及びQ11「倫理観」で、学士課程に比べて目立って高かった。その他の大半の設問でも、学士課程より高かつ

たが、Q2「人類の文化、社会と自然に関する教養」、Q13「多様な言語・社会・文化に対する理解」及びQ14「国際人として活躍する素地」では、学士課程より低かった。本学の大学院教育の、専門教育に特化した性格を示していると考えられる。

回答の標準偏差は、すべての設問で、学士課程より小さく、学生の受け止め方が比較的一様であることを示している。Q8「総合的な問題発見能力や課題を解決する能力」で0.38ともっとも小さく、Q4「コンピュータの操作方法や情報処理技術」でもっとも大きかった。Q8「総合的な問題発見能力や課題を解決する能力」で、回答の平均値は比較的低く、標準偏差が小さかったことは、今後の課題を示すものであると考えられる。

最頻値は、平均値が大きかった4つの設問すなわちQ5、Q6、Q7及びQ11で4、その他の設問では3であった。なお、これらの4つの設問は、学士課程で最頻値が4であった2つの設問とまったく異なっていた点には注目できる。

表 16 大学院課程における各設問回答の平均値、標準偏差及び最頻値

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14
平均値	3.3	2.7	3.3	3.3	3.7	3.6	3.6	3.1	3.3	3.4	3.7	3.4	2.7	2.3
標準偏差	0.49	0.49	0.49	0.76	0.49	0.53	0.53	0.38	0.49	0.53	0.49	0.53	0.49	0.49
最頻値	3	3	3	3	4	4	4	3	3	3	4	3	3	2

大学院課程についても、6つのDPカテゴリ別の回答の分布を調べた。資料数が少ないため、図示はしないが、DP1～4ではモードが3にあるのに対して、DP5では4に、DP6では2と3(同数)にあった。これらのことは、大学院課程修了者が、DP5「倫理観を持った市民として地域社会の発展に貢献する高い意識を」涵養できたと感じていることを示していると考えられる。

#### 4. まとめ

本調査では、全回答数3,052のうち41%を選択肢3が占め、また設問ごとの回答平均値の大半が3.0±0.1にあるという「中庸」的な結果であったが、ごく少数ではあるが、それら以外(平均値3から離れた値であったり、最頻値が2や4であった場合など)であった事項から、DPに掲げる教育達成目標の実現度を学生がどのように感じているか、ある程度浮き彫りにできたと考えられる。

**学士課程：** 学士課程全体では、卒業生は、「専門分野の知識・技能」が修得でき、「職業観」、「生涯にわたって学び能力」を涵養できたと考える一方、グローバル化人材の基礎を獲得したとは感じていないとまとめることができる。

学科別の特色も浮き彫りにされた。人間関係学部2学科では「自ら学ぶ姿勢」の涵養、これに加えて、心理臨床学科では「専門知識・技能」の獲得、人間文化学科では「幅広い教養」や「多様な言語・社会・文化に対する理解」の獲得、法学部2学科では「専門知識・技能」の獲得と「職業観」の涵養が達成されたと感じているようである。

大胆に推測すれば、全学でも各学科でも、平均値が3.0近傍にあり最頻値もすべて3である、Q1「個性的かつ堅実な人間性、自主性、創造性」、「物事を科学的に、論理的に考える方法や力」、Q11「倫理観」、Q12「地域社会の発展に貢献したいという気持ちや意識」は、本学が学生に強いインパクトを与えられていない項目といえるかもしれない。

**大学院課程：** 大学院課程では、修了生は、「専門分野の知識・技能」と「自ら学ぶ姿勢」は当然として、加えて「コミュニケーションの能力」や「倫理観」が得られたと考える一方、「教養」、「グローバル化対応能力」が獲得できたと感じていないようである。また、標準偏差の小ささから、多くの学生が比較的一様な受け止め方をしていることが窺える。

今回の調査が、各種の調査の中でも難しいと言われる卒業時調査に成功した理由は、DPをさらにコンポーネントに分解し、学生が具体的なイメージを持ちやすくしたことと、高い回答率を追求した結果であると考えられる。

今後、質問項目等を維持しつつ、現在のDPの下で編成されたカリキュラムで4年間の教育を受けた学生の卒業時を跨ぐ期間にわたってモニタリングを続けることで、本学の教育の成果と達成度に関する貴重な資料が形成できると考える。

## 【付録】

### 志學館大学のディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

本学は建学の精神「時代に即応した堅実にして有為な人間の育成」に従い、その教育目標を実現することを目指し、以下に掲げる資質・能力を修得した者に学士の学位を授与します。

- 1 個性的かつ堅実な人間性、自主性、創造性が身についている。
- 2 人類の文化、社会と自然に関する豊かな教養と科学的・論理的思考法、情報処理技術、コミュニケーション能力を身につけ、自ら学ぶことの喜びを知っている。
- 3 実践的で体系的な専門的知識と技能を身につけ、総合的な問題発見・課題解決能力を持っている。
- 4 職業観を持ち生涯学習し続ける能力を有している。
- 5 倫理観を持った市民として地域社会の発展に貢献する高い意識を持っている。
- 6 多様な言語・社会・文化を理解し、国際人として活躍する素地を持っている。